

キャサリン・ヒュームの回想録より

Kathyrin Hulme, Undiscovered Country, Chapter 7~9 部分的抜粋

グルジェフが教えたエクササイズの内容を初心者のために説明するのは、この個人的な回想録の本来の目的ではなく、私の手に余ることでもある。眠れない夜に頭を機械的に駆けめぐる思いを断ち切ろうとしたことがある人、あるいは三十秒の間だけでも機械的な連想に心を奪われることなく祈ろうとしたことがある人は、彼が私たちに教えた自らと関わるにあたっての毅然とした姿勢の持つ味わいをわずかなりとも理解できるだろう。彼が私たちに教えたのは、人が内的なエネルギーを増すことを助ける、基本的なスピリチュアル・エクササイズだった。

エクササイズについて彼が与えた最後の指示は、私に深い印象を残した。「修行僧のように単純でありなさい」、と彼は言った。「すべき仕事を与えられた修行僧のように、信頼をもってこのエクササイズをやりなさい。知ったかぶりをもってではない」。そう言いながら、彼は額を指さした。「知ったかぶりをもってではなく、確信をもってやりなさい」。彼は額から手を離し、太陽神経叢に触れた。「頭をもってするのではなく、フィーリングをもってやりなさい」[...]略...

「人のなかでは、ひとつの部分があれこれを望み、それとは別の部分がそれを為す」、と彼は言った。「人のなかにはこの二つの部分があり、その働き方には、このような法則がある。片方の部分だけに生じた望みが強ければ強いほど、その人間は、もう片方の部分をもって為すことができなくなる。持続的な努力においてさえ、これはそのようになる。若いうちは、<為すこと>への努力を<自然>が助けてくれる。だから、責任ある年代に達した人ほどは必死にならなくてもよい。だが、ある年齢を越えた後では、この種の努力はとて難しく、不可能なときさえもある」[...]略...

グルジェフのアパルトマンは、常にブラインドが降ろされ(だれもその理由を尋ねなかった)、客間のひとつだけの明かりが、じゅうたんに覆われた彼の長椅子の上を照らしていた。そこで私たちは、夜でも昼でもない、不思議な時空の世界、鎧戸の降ろされた窓の外の世界から完全に分離した世界にいた。

私たちは、いつも正確な時間にグルジェフのアパルトマンを訪れ、廊下でコートを脱ぐと、小さな客間に自分の場所を見つけ、ひとりひとりが別の部屋でエクササイズの進み具合について尋ねられる間、他の者たちは彼の執筆中の原稿を読んだ。深い理解をたたえた彼のまなざしを前にして、私はしばしば何も言えなくなった。もっと単純で、もっと的確に真実を反映した言葉を捜して私が口ごもる間にも、彼のまなざしは、私が味わっている自己嫌悪の奥まで見抜いているようだった。ある日、私からとりわけ中身のない報告を聞いた後、彼は真剣にうなずき、こう言った。「クロコディール、簡単なことではないのだ。ここでわれわれが試みていることは.....」。[クロコディール(子供を食べてしまってから涙を流すというワニ)は、グルジェフが著者に付けたニックネーム]

われわれが試みていること? 彼が「われわれ」と言ったことで、私は一瞬、動揺した。彼もまた、私たち同様に地面に縛られていて、私たちと一緒に、一步一步よろめきながら、意識の高みに向かおうと、闘っているのだろうか? 彼はすでに、私の目にさえもわかるほどの、非常な高みに達しているという

のに？ それとも、彼が「われわれ」と言ったのは、私たちが最初のハードルを越えて、機械的な世界——私たちがいま住んでいて私たちが知っているいまのところ唯一の世界——との同一化を離れて第一歩を踏み出すのを助けるための、計算された思いやりなのだろうか？

別の日、彼は、彼が外の世界で直面している厄介事について話しながら、また「われわれ」という言葉を使った。それまでも頻繁に、彼の何気ない言葉が突然に別のレベルでの理解をもたらしたことがあったので、このときも私たちは、もしかしたら月賦なしで新車を買えるかもしれないという彼の話に、注意深く耳を傾けた。「これはめったにない儲け話だ。だからこれがうまくいくよう、誰かに加護を求めなければならない」、と彼は言った。「君たちがそれにふさわしい聖人の名前を挙げなさい。私はその聖人にロウソクを捧げよう」。彼はそう言うと、私たちの先輩格にあたるミス・ゴードンの顔を見た。彼女は、願いをかなえてくれることで有名な、ある聖人の名前を挙げた。グルジェフは首を振り、その聖人のことならよく知っている、その聖人では「だめだ」と言った。「われわれのひとりに対して<弱み>を持っている聖人でなければいけない……。このワークをしているわれわれのひとり、私または君たちのひとりだ……」。彼は、呆然とした私たちの顔を順番に見つめてから、肩をすくめた。

「君たちがそのような聖人を指名できないなら、私は自分の守護聖人、聖ジョージに頼むことにしよう。だが、彼はとても高くつく。彼は金とか、またはロウソクとかいった品物には興味がない。彼は代償として苦しみを求める。内面における何かを求める。私が私の内面世界のために何かを作ること——彼はそれにしか興味がない。そして私がそれを作ったなら、彼は必ずそれに気づく。だが……このような苦しみは、とても高価だ」[…略…]

グルジェフは、彼が意識的に蓄積した力を私たちに向けて頻繁に放射し、私たちが最初の試みで必要な強さを維持できるよう、助けてくれていたと思う。「人間にとっての真の内面世界」に到達すること……。彼は私たちのなかに、この目標に向けての激しい願望をかきたてた。

「人には三つの世界がある。第一の世界は、外側の世界、われわれの外側で起こるすべてから押し寄せてくる印象の世界だ。第二の世界は、いわゆる内側の世界、われわれの身体の内部的な働きが総体として作り出す世界だ。そして第三の世界は、魂の世界……。昔の人々は、これを人間にとっての真の内面世界と呼んだ。人にはこの三つの世界がある」。さらに彼の目は、「そして人は、このうちどの世界で生きたいかを定めることができる」と言っているようだった。「このエクササイズは、人間にとっての真の内面世界、魂の世界のためのエクササイズだ」[…略…]

二、三週後、まったく別の話をしていたグルジェフは、あたかも話のついでのように、私のなかにくすぶっている頑固な否定性について触れた。その日、彼はルーエンまで車で出かけ、全部で百六十八マイルの行程をいつもながら驚くべき速度で周遊し、夕方七時半には、私たちが待つカフェ・ド・ラ・ペに戻ってきていた。彼は晚餐室に入ってくると、うれしげな溜め息をつき、「バラまたバラ」と、自分の満足について語った。彼はその日、あるビジネス上の取引に成功し、あと一週間は経済上の特定の問題について考えなくてもよくなったという。だが、この「バラまたバラ」はやがて消え失せ、「トゲまたトゲ」になるという。それでもなお、外側の世界のトゲというのはよろしい、と彼は言った。外側の世界にトゲがあるおかげで内側の世界にバラが咲くのだから。

「これは法則だ」、と彼は言った。「ひとつひとつの不満に対応して、必ずひとつひとつの満足が存在する」。彼はコーヒーを飲みながら、「外側の世界のバラと内側の世界のバラのどちらが欲しいか？」と私たちに尋ねたが、「これは複雑すぎる問題だ」と言って、質問を取り消した。「それよりも、私から君たちに、ひとつ言っておくのがよいだろう」、と彼は言った。「これを知ったなら、君たちは一生、裕福に暮らせる」。彼は人差指を立てたまま、次のように言った。

「人のする努力には二つの種類がある。内側の世界での努力と外側の世界での努力だ。だが、この二つが出会い、第三の世界のための素材を作り出すことがない。内側の世界での努力と外側の世界での努力を出合わせるというのは、神のお膳立てによっては不可能だ。自分が親からもらったものによっても不可能だ。方法はただひとつ、あなたは意図的に、外側の世界での努力と内側の世界での努力を出合わせなければならない。そのときはじめて、あなたは人にとっての第三の世界、魂の世界の素材を作ることができる」

十一月十七日、私たちは、グルジェフの指導のもとで、第三シリーズのエクササイズへの取り組みを始めた。この新しいエクササイズは複雑で、これまでになく、内的な注意力を持続させる必要があった。私たちがそのときに体験したような「存在における努力」のことを、グルジェフが若年時代の探求の旅で訪れた古い僧院の先達たちは、「自らを打つこと」と呼んだという。「自らを打つ」という言葉は、横暴きわまりない自我の主人となることに向けての毅然とした努力という意味では、私たちの体験した努力を適切に描写していた。しかし、私たちの試みには、「自らを打つ」という言葉から連想されるようなマゾイスティックな要素は、ひとかけらもなかった。その逆に、私たちが体験したのは、かつて味わったことのない深さの内的な満足感だった。エクササイズの毎回のセッションで、私たちは自らの存在の中心に、グルジェフが「稼ぎ取った真珠」と名付けたものを見出した。

グルジェフは私たちに、毎回のエクササイズの前に必ず口にしなければならない誓いの言葉を教えた。このエクササイズから何かを得たら、私はそれを自己満足のためではなく、全人類のために使うという誓いである。この「すべてに対する善意」の誓いは、その意図の深さにおいて私を深く揺さぶり、私に甚大な影響を及ぼした。私は生まれてはじめて、自分が自分に任された小さな部分の成長のために努力することで、人類に対して真の意味で役に立つ何かをしているという実感を持った。かつて私は、ワークというものを、完全にエゴイスティックで、自己中心的な観点から理解していた。ところが突然、ワークという言葉の意味は大きく広がり、まるで生命の樹のように、無数の枝を伸ばして花を咲かせ、全人類を包含するものとなった。それは途方もないことを意味していた。より深く存在することに向けてのたったひとりでの努力を通じて、人は全人類がほんの少しだけ神に近づくことを助けられる。エクササイズの前にこの誓いの言葉を口にすると、私は、私が私の真の内面世界のために何かを作るということは、全人類のために何かを作るということなのだと思った。これが「キリストの神秘の体」についての私の最初の体験である。「キリストの神秘の体」の教えについて、当時の私は何も知らなかったが、その後の長い年月を経て、それはいまだに底知れない神秘をたたえてはいるが、私が身をもって理解できる教えとなった。